４．　肉用牛繁殖農家における分娩間隔短縮に向けた取り組み

玖珠家畜保健衛生所・[1)]大分農業大学校
○池堂智信・手塚渓・佐藤邦雄[1)]・木本裕嗣

【はじめに】

2019年4月に「大分県肉用牛振興計画」が策定され、分娩間隔短縮が重点項目の１つとして掲げられている。今年度からは家畜保健衛生所や各関係機関が協力する繁殖プロジェクトチームを結成するなど、県を挙げて分娩間隔短縮に取り組んでいる。今回はその中でも当家畜保健衛生所が行なった対策について報告する。

【取組内容】

昨年までの繁殖巡回では妊娠鑑定（以下妊鑑）を主に実施。繁殖に関する情報は、前回授精日や種雄牛名しか記載されていないことが多く、農家の繁殖状況を把握出来ていなかった。このような状況をうけ、管内の繁殖巡回を行なう肉用牛繁殖農家98戸の全繁殖雌牛2,166頭にて、前回分娩日、人工授精日、状態確認結果を簡単に一覧出来る新しい繁殖台帳を作成。これにより、農場毎の分娩間隔、空胎期間、発情発見率、受胎率、初回授精日数を計算でき、農場の繁殖状況を把握できるようにした。この繁殖台帳を元に、家畜保健衛生所と農家が協力して検診牛を選定する繁殖巡回を開始した。

【取組結果】

取り組み開始以降の6～9月繁殖巡回における検診頭数は1,258頭で、昨年度同時期の1,006頭より増加。妊鑑頭数も1,068頭と昨年度の914頭より増加。分娩後の状態確認（以下状態確認）を行なった頭数は190頭と昨年度の92頭と比較し2倍以上に増加。また、状態確認を行った頭数割合は15.1％と前年度同時期の9.1％に比べ有意に増加（P値＜0.05）。令和2年4月及び5月に分娩した282頭について、推定分娩間隔380日以下（空胎期間97日以下）の頭数割合は、56.0％（158頭/282頭）であり、2019年度分娩間隔380日以下の頭数割合45.7％（775頭/1,695頭）と比較し、有意に増加。（P値＜0.05）

【考察】

対策開始後に繁殖巡回時の状態確認割合が増えており、今まで見逃していた未発情牛や長期不受胎牛に対して検診を実施出来ていることが示唆される。また、妊鑑頭数も昨年と比べ増加したが、これは早期妊鑑の頭数が昨年より増加したためである。推定分娩間隔380日以下の頭数割合は、2019年度の分娩間隔380日以内の頭数割合と比較し有意に増加した。これは、各農場の繁殖状況を把握し、長期不受胎牛となる可能性の高い牛へ状態確認や早期妊鑑を行い、より早期に対策を講じたためだと思われる。今後は、今回作成した繁殖台帳を用いることで農家ごとの問題点を見つけ、それぞれの農家に沿った細かい対策を講じていく。